

# 笑われるバンブル

## —『オリヴァー・トウィスト』の風刺—

木樽 周夫

### 序

なぜバンブルはおもしろいのか。当然救貧院などの権力への風刺が強く描かれていることが主な理由ではある。本論では、風刺や皮肉の中に隠されている笑いに特に注目する。

まず、彼の服装や姿に目を向けたい。彼が登場するたびに彼の着ているものに言及がある。権威があるのは服の中身ではなく服そのものであることがよく分かる。その理由もオリヴァーが生まれた場面に書かれている。服装がシンプルになればなるほど、彼について説明することすらなくなっていくことに、バンブル自身の服装や姿の滑稽さがある。この作品では救貧院、救貧法、という社会的問題や権力についての問題を提起し、その問題点をバンブルに押しつけ彼自身を破滅に追い込んでいるように見える。つまり制度自体をバンブルに反映させ、彼を破滅させることで、制度そのものも崩壊させているようだ。つい笑ってしまう何かがその崩壊の仕方にありそうである。それが彼の姿形とどのように関係しているか検証し、バンブルの滑稽さを考えてみたい。

次にバンブルや教区の関係者と実際の教区の人びとの関係から、教区吏という立場と彼の言動について考察する。バンブルの言動や振る舞いの滑稽さも理解出来るかもしれない。さらに彼の態度を冷めた目で見ている人びととの対照で何か面白さが生まれていると考えられる。彼の子供に対する残酷な振る舞いが、実は冷笑を生む行動で風刺になっている。

最後にバンブル自身がこの物語でどのような存在であるかを考える。彼の言動、行動、暴力の中に、何らかの面白さを意味しているように思える。社会の悪となってしまった教区役人のバンブルの滑稽さを描くことで救貧院や救貧法を徹底的に敵と見なしている。そこにバンブルという誇張された人物を登場させ、アクセントを付け加えている。深刻な状況を描いている中にもフィクションとして現実から少し離れた人物として、風刺と言うだけでない重要な役割をも背負わされ登場している。

上記のことから、思わせぶりの彼の残酷で、権力を見せつけた行動は許し難く思える。にもかかわらず、私たちは彼の姿や振る舞いを見て笑ってしまう。この笑いそのものが強烈な風刺になっているようである。この風刺となりうる笑いとはどのようなものか本論で明らかにする。

## 1 バンブルの容姿

挿絵からも分かるようにバンブルは太っていてなぜか滑稽に見える。子供たちに酷い体罰を加える人間でありながらなぜ、笑いを誘うような格好なのだろうか。ここにもバンブルに対する風刺の要素があると考えることが出来る。



Figure 1 Parish Beadle (Cruikshank 1827)

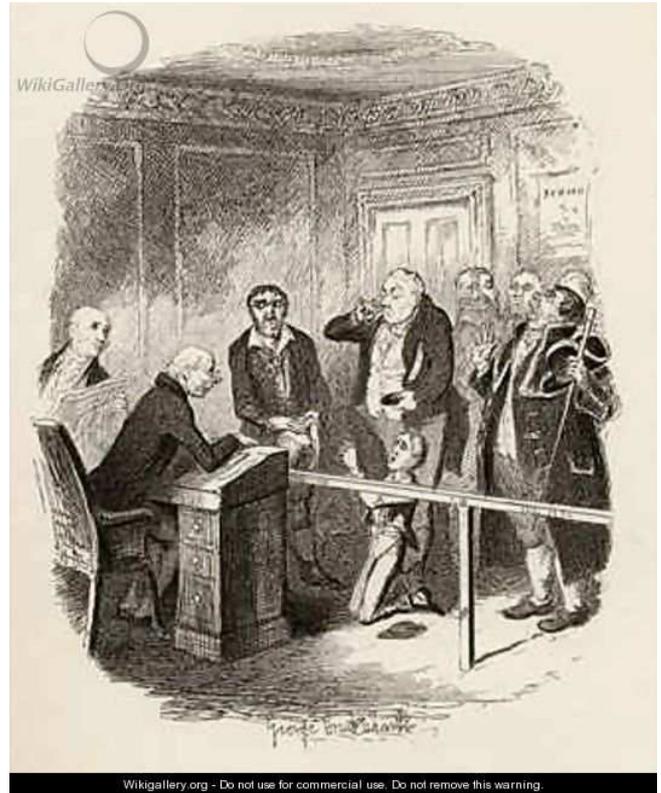


Figure 2 教区吏バンブル (1 番右)



Figure 3 'The New poor laws' (Seymour 1836)



Figure 4 救貧院院長バンブル

まず、なぜ笑いを誘う風刺として教区の役人がそのような体型で描かれているか考えてみたい。この作品の挿絵画家であるジョージ・クルックシャンクがこのような体型で笑いと風刺を表現していた。『オリヴァー・トウィスト』でバンブルを描く以前に、クルックシャンクはすでに風刺画家としてバンブルに体型がよく似た教区吏の姿を描いている(Figure 1, *Gentleman's Pocket Magazine* 18 January 1827)。当時風刺画家として有名であったクルックシャンクがこのようなイラストを描くということは、この姿形の教区吏は一般の人びとにとってきつとおもしろいものであったに違いない。この挿絵はバンブルの姿を読者に容易に思い出させる(Figure 2)。三角帽をかぶり、杖を持ち、金のボタンがついているコートを着ている。本文では“a fat man, and a choleric one”(ch.2)、外見は“cocked hat and cane”(ch.2)を身につけ、“the large brass buttons which embellished his coat”(ch.4)を着ていると説明されている。だから、『オリヴァー・トウィスト』で初めてバンブルが登場したとき、もうすでに読者はお馴染みの漫画的な姿にすぐに反応してしまっただろう。

また、ロバート・シーモアもクルックシャンクの描いた教区吏に似た挿絵を描いている(Figure 3, *Figaro in London* 20 February 1836)。そこでは教区吏が頼み事に来た家族を暴力で追い返そうとする姿が描かれている。おそらく食料も足りていないと思えるほど痩せた家族に対するこの教区吏の態度に見る人は憤りを感じただろう。このシーモアの絵では教区吏の暴力が鮮明に描かれている。救貧院にわざわざ来た家族も描かれている様子から、どうしても救済が必要なことがよく分かる。その家族に教区吏はただ暴力を振るう。バンブルも同じように、“the great principal of out-of-door relief is, to give the paupers exactly what they don't want”(ch.23)とコーニー夫人に言っている。シーモアのイラストにはまさに貧民がほしがらないものが教区吏によって与えられているところのようである。服装を見てもクルックシャンクの教区吏ともかなり似ている。ただ、クルックシャンクと異なる点はシーモアの描く教区吏は威厳と暴力のみしか描かれていない点である。その部分で風刺的要素が少し足りないように思える。

服装についてはバンブルにはさらに細かい記述が目立つ。登場とほぼ同時にバンブルの服装に関する記述がある。彼がオリヴァーを救貧院に移送するために養育院に到着するとすぐ、机の上に帽子を置いて、“glanced complacently at the cocked hat, and smiles.” (ch.4)と満足そうにする。当然この行為は自分の地位に満足し、他人にも権威を見せつけている。のちにオリヴァーを引き渡すことになる葬儀屋のサワベリー氏に、怪我人を治療しているサマリア人が描かれている真鍮のボタンを褒められバンブルは気分を良くしている。

このようにバンブルの身につけているものや服装が多く述べられていることがなぜ風刺的なのか。この物語の第1章の終わりを見ると、オリヴァーが生まれてすぐ、古着を着せられた場面で、“What an excellent example of the power of dress young Oliver Twist was!”(ch.1)とあり、着物次第で身分が決まってしまうことをオリヴァーを通して実証している。オリヴァーも何も着ないただの幼児なら身分は分からない。冒頭で服装について見た目では人間そのものは全く分からないと前置きをしておいて、バンブルには権威を象徴する服装を身につけさせているのである。

服装で人間を判断できないと断言してあるので、オリヴァーの身分が救貧院にふさわしい人物でないことも冒頭で予想出来るし、バンブルがその服装に見合うだけの人間でないこともこの物語の出だしで分かってしまう。ただ「白チョッキ」と呼ばれるだけの委員会の人間もあとで登場する。にもかかわらず、権力は自分自身にあると思ひ、服装と彼自身とのギャップになにも気がついてい

ないバンブルがすでにおもしろい存在なのである。

オリヴァーもノア・クレイポールと格闘し、服がちぎれてボロボロになった次の日に葬儀屋を逃げ出す。ブラウンロー氏にせっかく新しい服を着せてもらっても、それまで着ていたフェイギンにもらった古着が売られていることが分かり、それを手がかりにオリヴァーの居場所が判明してしまう。新調の服は脱がされ、古着に戻される。オリヴァーの場合はバンブルよりも服装の変化が多く、その度に彼の身分や行動も変わってしまうのである。オリヴァーの例からも分かるように、バンブルの身分ももうすでに固定されたものでないことも十分予測でき、また読者の期待通りに彼の人生も変化していく。

第36章ではコーニー夫人と結婚後、バンブルが教区吏から救貧院院長になり、服装が変わってしまったことが描かれている(Figure 4)。そこでは“*There are some promotions in life, which independent of the more substantial rewards they offer, acquire peculiar value and dignity from the coats and waistcoats connected with them. ... Strip...the beadle of his cocked hat and gold lace, what are they? Men, mere men. ... Dignity, and even holiness too, sometimes, are more questions of coat and waistcoat ...*”(ch.37)と書かれている。服装が変わり、人間バンブルになると、彼は結婚したコーニー夫人から酷い扱いを受けることになる。この場面でバンブルはただの人間になり、ただの人間になると彼は妻からも邪魔者扱いされるような人物であることが証明されている。

以上のことから、バンブルの見た目の滑稽さと弱い者に対する傲慢な態度は、クルックシャンクとシーモア両方のイラストを合わせたようである。教区吏の滑稽な姿を笑うことで怒りを乗り越えてあきれた笑いという風刺になっている。クルックシャンクが描いた教区吏について Sally Ledger は“... Cruikshank became the first of the cartoonists to represent the lowly parish officer satirically, as a figure of both hate and fun. It was this image of the beadle as a corpulent, pompously attired, self-important pretty official that established the satirical genealogy upon which Dickens and Cruikshank would together build a few years later, and which would be widely deployed by protestors against the new Poor Law.”<sup>1</sup>とディケンズとクルックシャンクとのイメージの一致を述べている。シーモアの描いた暴力と権力をむき出しにしている教区吏だけでは、強力な風刺にはならなかったのではないか。バンブルの見た目の面白さはクルックシャンクの風刺画と、実際の教区吏の暴利の両方を描く必要があった。ディケンズはそれらを組み合わせてバンブルの暴力と権力、滑稽と風刺を描き出し、教区の役人を当時の人びとが言い表したい姿にして登場させた人物なのである。

## 2 バンブルの自己批判

バンブルの行動も強い風刺の対象になっている。特にこの物語の前半ではバンブルの思うように物事を進めている。その彼の行動のなにかがおもしろいのか考えてみたい。

まず、オリヴァーを救貧院から追い出そうとする場面から考えてみたい。煙突掃除人に売り飛ばそうとする時と、葬儀屋のサワベリーに売り飛ばす時の二度になる。バンブルの言い分は懸賞金を付けてでもオリヴァーを追い出すことが教区の負担を減らすことになるということと、素行不良で

あるオリヴァーを出来るだけ早く手放したいということのようである。

バンブルがマン夫人の養育院から 9 歳になったオリヴァーを引き取り、救貧院に入れる。そこで例のおかゆの事件があり、まもなく追い出されることになる。救貧院の表の壁に五ポンドでオリヴァーを引き取ってもらいたいというビラが貼られた。実際、救貧院の子供の扱いは、“If you were a pauper like Oliver Twist, the overseers of the poor could apprentice you – without your consent – once you turned nine until such time as you turned twenty-one.”<sup>2</sup>だったようである。オリヴァーの知らないところで自分の処遇が決まってしまうが、それが当時の救貧院の手順であった。

そこに、煙突掃除人のガムフィールドがやってくる。当時、煙突掃除を子供にやらせることは危険で、死ぬ子供もいた。彼も委員会から“...having bruised three or four boys to death already”(ch.3)とされている。だから委員会はその危険さを理由にガムフィールドから懸賞金を値切り、結局三ポンド十シリングにした。ここでも問題は、彼らの目的が、危ないことを理由にオリヴァーを徒弟に出すことをやめるのではなく、懸賞金を値切ることであり、オリヴァーをうまく追い出すちょうど良い理由として扱っていることである。だからこそ委員会の「白チョッキ」が煙突掃除人の姿を見て、“Mr.Gamfield was exactly the sort of master Oliver Twist wanted.” (ch.3)だと思う。委員会にしてみると、オリヴァーのような思い通りにならない子供に五ポンドの懸賞金も払いたくなかったのだろう。さらに、この仕事でオリヴァー・トウィストが死んでしまうことも想定している。それでもバンブルは “the expense to the parish is three pound ten! – three pound ten, Oliver! – seventy shillins – one hundred and forty sixpences! – and all for a naughty orphan which nobody can’t love.” (ch.3)とオリヴァーに文句を言う。煙突掃除の奉公は結局許可が出ず、のちに五ポンドとともに葬儀屋のサワベリーに引き取られることが決まる。

救貧院が子供たちに費用を節約している例も記述されている。救貧院ではある子供が、空腹でいつか隣で寝ている子を食べてしまうかも知れないと嘆いている。ここからも救貧院が子供たちの食事に費用をかけていないことが分かる。「白チョッキ」はガムフィールドにオリヴァーを引き渡そうとする際、“...and his board needn’t come very expensive, for he hasn’t been over-fed since he was born. Ha!ha!ha!” (ch.3)と説明している。オリヴァーが徒弟に行く葬儀屋の主人サワベリーはもうけが減った理由を “there’s no denying that, since the new system of feeding as come in, the coffins are something narrower and more shallow than they used to be;...” (ch.4)とバンブルに救貧院からくる死体について話している。これらの例からも分かるように、出来るだけ費用をかけないことは周知のことであったようだ。それほど救貧院での食費の節約は相当なものだったと言える。そしてバンブルの威厳や暴力も、まともに食事すらすることの出来ない弱者にのみ向けられていることものに分かる。

ここで扱われるオリヴァー、救貧院、徒弟の問題は金銭の問題のようである。子供たちに関わる食費を節約して、バンブルらは私腹を肥やそうとしているように見える。養育院のマン夫人によい例がある。彼女は支給される費用について、“an elderly female who received the culprits at and for the consideration of sevenpence-halfpenny per small head per week. ... she appropriated the greater part of the weekly stipend to her own use, and consigned the rising parochial generation to even a shorter allowance than was originally provided or them; ... (ch.2)と説明があり、自分の手元にある金銭の使い道は当事者の判断で使えたようだ。ここままで救貧院に関わる人物を笑うことが出来るだろうか。必要な経費を使わず、その結果、命を危険にさらす煙突掃除の徒弟、飢えに苦しむほどの食事、そして葬儀屋。すべ

て死に関わる出来事になっていく。

死について何事もなく、おもしろおかしく話をする事が出来るバンブル自身が自らの立場や環境を皮肉的に描いているように見えてくる。救貧院の子供が食事を与えられずに栄養不足で死ぬ。それで棺桶の大きさが小さく、費用がかからずに済むという冗談を言っている。自分が常に死に囲まれていることを証明してしまっている。George Mikesは皮肉を言う人間について “But, of course, he is even more afraid; he is permanently preoccupied with the fear that he is joking about. Cynicism always has an element of cowardice in it. ... It is always the man who is afraid of, or preoccupied with, death who jokes about it. The cynical joke is an attempt to tame a powerful opponent.”<sup>3</sup>と述べている。バンブルは自分の教区の貧民が苦しみ死んでゆくことを冗談で話しているが、自分自身がそのような状況になることを内心恐れていたことになる。だから弱者に対して傲慢で横柄な態度をとっているが、彼にとってそれが救貧法に反対し、思い通りにならない違反者を抑圧する唯一の手段だったのではないか。だから彼が貧民である弱者が死ぬのを皮肉って話すことが、彼自身への皮肉にもなっている。権力や死を一番恐れているのはバンブルである。バンブルが弱者を皮肉れば皮肉るほど、自分がますます惨めになってくる場面である。ただ、バンブルはここでも自分の惨めさに気がついていない。そのような彼の姿を見て読者はなんとなく笑いに誘われる。

金銭に関わるバンブルの露骨な態度と言動がさらに分かる場面がある。彼が他の教区に二人の子供を押しつける場面を見てみたい。バンブルがロンドンのクラークンウェル裁判所に行く場面である。彼は二人の養育院の子供を自分の教区から追い出そうとするのである。ここでも彼が自分の教区で子供の負担を避ける努力が見られる。当時、教区間では、“if the master lived in a parish other than the pauper’s, there was a financial incentive for the pauper’s parish authorities to place him with the master, for after the child spent forty days in another parish, he was no longer the financial responsibility of the parish that had bound him out.”<sup>4</sup>であった。つまり、バンブルが追い出そうとしている二人はおそらくその教区の滞在期間の問題であり、二人の子供の負担は金銭的に絶対に負わないというバンブルの意志が感じられる。40日以上自分の教区で働いていないことを、バンブルはロンドンで証明して見せようとしているのではないだろうか。自分の教区にいる間に死なれると負担が増えるから、バンブルはどうかして生きている間に他の教区に追い出したい。彼はこの場面以前に、教区負担の葬式になった家族に激昂している。これら言動や行動も、すでに述べたように、彼が使う皮肉であり、彼自身への皮肉にもなっている。

それほど死について冗談をいうバンブルにオリヴァーの幼なじみのディックがオリヴァーに伝言を頼む場面がある。彼のオリヴァーへの伝言はバンブルの今までの言動、存在そのものがまるで空虚に感じるようなものであった。“I was glad to die when I was very young; ... and it would be so much happier if we were both children [Dick and his little sister] there together.” (ch.17)と伝言を頼む。バンブルが無意識に皮肉を用いて避けている死そのものをディックから突きつけられた。だから直後に “Mr Bumble surveyed the little speaker, from head to foot, with indescribable astonishment”と彼らしからぬ態度をとる。バンブルは弱点を見事にこの小さな子供に見抜かれてしまった。そしてバンブルはマン夫人にすぐにディックを遠ざけるよう命令し、委員会に報告すると言い出す。このバンブルの狼狽した姿を見ると、読者が恥ずかしくなるくらいの大げんか態度である。普段軽蔑した扱いをしている子供との対照的な状況に、笑ってしまう。

ここで扱った出来事では、救貧院に関わる人物がお金のために教区の人びとを犠牲にして、彼らの苦しみを皮肉って笑っている。しかし、その笑いこそがバンブルたち教区の代表自身らの皮肉として描かれている。物語後半で、結局バンブルはお金も地位も失い、コーニー夫人の暴力で命の危険すら感じることになる。そしてコーニー夫人によってようやく、バンブル自身気がついていないことを知るようになる。“We don’t want any of your interference. You’re a great deal too fond of poking your nose into things that don’t concern you, making everybody in the house laugh, the moment your back is turned, and making yourself look like a fool every hour in the day.” (ch.36)というコーニー夫人の言葉はまさに、今まで、彼の周囲の人間が彼に対してとってきた行動そのものである。

子供への虐待は相変わらず見るに堪えないが、そこまでしなければ、バンブルを笑いの対象、つまり強烈な風刺にすることは出来なかったのだろう。Bergsonは“laughter ‘corrects men’s manner’. It makes us at once endeavour to appear what we ought to be, ...”<sup>5</sup>と言っている。バンブルも読者が自分のことを笑っていると気がつけば、少しは恥ずかしい思いをしたのではないか。しかし、残念ながら、彼の姿を見て、笑っている読者にバンブルが気付くことは決してない。バンブルは何も知らずに弱者を笑い、皮肉り、暴力を振るうが、その間、彼は読者によって笑われ、皮肉られ、社会的地位すら失ってしまう。だから、彼は我々読者にずっと笑われ続け、登場するたびに恥をかき続けるのである。そしてこの物語が存在する限り、彼は永遠に矯正され続ける。

彼自身はこの作品では誇張された存在で、彼自身が救貧院制度であり、社会の悪であることはすでに述べた。彼が矯正され続けることは、当時あった社会の悪を常に懲戒していることにもなる。Sally Ledgerは“Dickens...develops the figure of the beadle in the laughably self-important and venal Mr Bumble; he emphasises the effects of the New Poor Law on children in particular; ... he emphasises the causal link between poverty and crime; and he exploits to the full the capacity of melodrama and satire for both comic and radical expression.”<sup>6</sup>とバンブルを分析し風刺の要素を指摘している。バンブルらの行動が自己批判的に描かれていることが分かった。ただ、それに気がつかなければ、彼らは永久に作品中で自己批判を繰り返し、読者に笑われ続け、悪を矯正され続けるのである。

### 3 バンブルの存在

教区の役人をおもしろく描くことで分かることは何か。この作品は新救貧法に反対している作品とすることが知られている。当然教区吏や委員会の人物などは新救貧法の象徴として誰にでもわかりやすい。誰もが見慣れている教区吏を矢面に立たせ、救貧法、救貧院制度反対の立場に読者を巻き込もうとしていることは分かる。そのためバンブルも相当誇張された姿で描かれているはずである。しかし、バンブルこそが救貧院であり救貧法、つまり社会の悪の代表にのし上げられてしまった。実際の教区に関わる人物よりそれらしい人物になってしまった。だから救貧法や救貧院に関わるすべての人がこの作品では悪の代表であり、読者も彼らが本当に社会に対して悪であると考えてしまう。象徴だったものが限りなく現実近づいてしまった。

バンブル一人によって、救貧院制度の悪辣な環境が分かってしまう。救貧院や養育院にいる子供達への暴力は当時の役人たちの孤児たちへの暴力が頻繁に起こっていたことを表している。その暴

力をもこの作品では描いている。バンブルは全く気にもせず子供に対して暴言、蹴る、殴る、杖で叩くなどを行う。誇張とはいえ、ここまでの暴力を作品中に描く必要があるのだろうか。たとえば、“a tap on the head with his cane” (ch.2)、 “he was allowed to perform his ablutions, ... in the presence of Mr bumble, who prevented his catching cold, ... by repeated applications of the cane.”, “he was ... flogged as a public warning and example.”, “you young rascal” (ch.3)などオリヴァーに対する暴力、暴言は甚だしい。救貧院の中では当然のように食事を十分にさせていない。9歳のオリヴァーや、それ以下の子供たちにとって、相当残酷な描写がされている。やっていることはフェイギンやサイクスとほとんど変わらない。これらの残酷無慈悲な描写は風刺と呼べるのであろうか。

このようなバンブルの態度は、見ている人に彼に対する同情すらしたくなるような憐れみを感じさせ、大人げない態度に見えるだろう。読者に同情すら覚えさせるような態度だからこそ風刺と考えて良いのではないか。ここで描かれている行為は子供を痛めつけている単なる暴力の描写だけではなく、行為者であるバンブルがとてもかわいそうな人間に思えてしまうように描写されている。この描写の力によってのみ描ける、情けない大人の行為だったのではないだろうか。風刺には“Satire,...is aggressive, a way of humiliating others and establishing the satirist’s superiority.”<sup>7</sup>という要素もあり、バンブルを風刺として表現するには、表現方法を強くする部分も出てくることになる。それだからこそバンブルは、弱い者をいじめればいじめるほど、恥をかいている。暴力を受けるオリヴァーが一番の被害者で憐れなのだが、同様にバンブルも十分憐れなのである。

バンブルはこの物語後半で未亡人のコーニー夫人と結婚する。愛情以外のものがこの結婚の要因になっていそうである。コーニー夫人の家をバンブルが訪れ、(特別な用件も言わないので、おそらく求婚が目的のように思われる) 彼女がしばらく外出している時、彼は家の中のものを物色する。そして、結婚を申し込む場面でも、家の広さと、救貧院から支給されるものなどを夫人に確認している。そして具合の悪い今の救貧院院長が死ねばコーニー夫人が次期院長になることを示唆している。つまり、バンブルは教区吏でありながら、救貧院院長の夫になることを目指しているのである。

しかし、救貧院院長になったのはバンブルであった。教区吏ではなくなり、すでに述べたように、彼が身につけていたものは何もかもなくなった。すると彼は妻にすら暴力的な態度をとることが出来なくなる。コーニー夫人に、バンブルは男の特権は命令することで、女の特権は男の命令に従うことだと言っている。これは彼が教区吏だった時のことで、教区吏でなくなってしまっただけで、今までの自分の考え方や意見すら全く意味をなさなくなってしまっている。つまり、彼の権力であり、教区の象徴であったものがなくなった。教区吏の時の服装がなければバンブルには何の権利もなくなってしまった。

バンブルが図らずも救貧院院長になってしまった件に関するおもしろい事実がある。“One qualification that a master was expected to possess was a wife, for it was standard practice (endorsed by the Commissioners in London) to appoint a married couple as master and mistress of the workhouse. For his reason it was not unknown for an unmarried workhouse schoolteacher to seek a spouse for no other reason than to climb the occupational ladder.”<sup>8</sup>という事実があった。バンブルは結婚したことで教区吏ではなく、救貧院院長になることが十分予測可能だったことになる。そのことを知ってか知らずか、救貧院の婦長と結婚した。彼は自ら教区吏の職を辞めたのも同然である。

救貧院と教区の象徴であったのはバンブル自身ではなく、彼の立場と服装だったことがここで再

確認出来る。同時に、彼の無知までもが明らかになってしまった。服装の中身だけでなく彼自身の体の中身まで空っぽだった。“juries is inedicated ...” (ch.4), “Antimonial” (ch.5)など、言葉の間違ひから分かる無能さが証明されたことになる。

以上のことから、バンブルのイメージは救貧院や救貧法の象徴であり、社会の悪として描かれている。そのことで当然バンブルには読者の風当たりは強くなるが、彼の子供に対する酷い仕打ちは子供たちへの同情のみならず、バンブル自身への憐れみになるようにも描かれている。そのことで彼は風刺化されている。風刺によって読者の怒りだけではなく、嘲笑の的にもなっている。嘲笑的になることこそが悪にとって一番つらいことなのではないだろうか。恐れられているはずが笑われてしまう。自分の意図とは全く逆になってしまう。コーニー夫人との結婚後、そのことが明白に描かれている。しかし、それに気がついていないバンブル自身が一番の風刺の対象になっているのである。

## 結論

本論では、バンブルの容姿、言動、行動などから彼に付随する滑稽さを考察した。そしてその滑稽さが読者に与えるものは何かを考えた。彼の理不尽な行動はすべて、笑いとなり、そのことで風刺になっている。風刺に特化した漫画的なクルックシャンクの挿絵と凶悪で嫌悪感を抱くシーモアの挿絵の両方の特徴をうまく融合させることで、バンブルという当時の読者が教区の役人に持っていた複雑な感情を描き出すことが出来たのである。

読者にとって、おもしろい人物と言うだけでは好意のみを抱きかねず、あまりにも凶悪な人物ではその人物を見ることさえ避けてしまうだろう。いやな人物に目を向けさせることで、当時の人びとにはっきりとした教区吏、または救貧法への対抗意識を芽生えさせている。クルックシャンクの挿絵を見てきた読者が抱く教区吏という曖昧な存在がディケンズの文章力ではっきりとしたイメージになったとも言える。ディケンズを風刺家と考えると、“The satirist is often a journalist or pamphleteer whose only weapon is his pen with which he fights kings, tyrants and obnoxious political regimes.”, “Satire, in addition to its aggressive content, has a strong moral content...”<sup>9</sup>と、ディケンズのジャーナリストとしての経歴を考えれば、この作品と一致する内容の記述も見ることが出来る。クルックシャンクやシーモアの挿絵を上回る程の教区吏のイメージがディケンズの文章にはある。だからこそ **bumbledom** という言葉もこの作品から生まれてくる。

風刺や皮肉も含め、バンブルから生じる笑いが彼自身の立場の空虚さを表している。バンブルが身につけている物は彼自身とは直接関係のない単なる教区の象徴であることはこの物語の最初から読者には知らされている。その中身のない人間が何か行動したり、話したりすればするほど笑いが起こり、その笑いによって彼自身が自らを風刺そのものにしていく。彼の行動、言動はすべて彼自身から出てきたものではなく、彼の身につけているものが彼にそうさせていただけであった。それに気付かないバンブルとそれに気付いている読者とのギャップからもまた、風刺という笑いが生まれている。

作者であるディケンズの語りからも風刺され、自分でも自分自身を風刺してしまっている。それ

をみた読者の笑いによってさらに彼は風刺されている。このこと自体相当皮肉的である。Bergsonは笑いについて、“Laughter is, above all, a corrective. Being intended to humiliate, it must make a painful impression on the person against whom it is directed. By laughter, society avenges itself for the liberties taken with it.”<sup>10</sup>と笑いの持つ性質について述べている。まさにバンプルに当てはまる記述である。バンプルは読者に笑われ、屈辱を与えられている。そのことで彼は風刺になっている。実際、救貧院の洗濯場でコーニー夫人を含め、そこで働く女性達に笑われ、惨めにその場を去る場面が描かれている。笑いの的になったバンプルはつらい思いをする。さらにその光景を笑う読者もいる。

以上のことから、バンプルの滑稽さとそれから生じる笑いによって、強い風刺が成立している作品とも言える。この笑いによって彼らは苦しんだだろう。新聞などと違い小説という形で残ったため、多くの人に読まれ、そして長期間にわたって笑いという風刺が続いたことになる。また読者がその風刺に気がつかない場合でも、ただ笑うことだけで風刺になってしまう。当時の子供に対する虐待が描かれてはいるが、この作品を読みバンプルを見て、大いに笑うこともこの小説に必要な要素の一つである。当時、教区吏や救貧院に関わる人びとが、当然正しいと思っていた行動、言動、思考を、多少の誇張を含め、事実に基づいて描くことで、これほどの笑いが生じてしまうことが問題でもあり、風刺でもある。そして問題提起をしている段階ですでに笑いという痛快な風刺が誕生してしまう。バンプル、救貧委員らはこの時点でもう風刺からは逃げ場がないのである。風刺の対象としてしかこの作品では生き残ることが出来ない。それでも惨めさという思い罰が彼らに与えられ生きていかなければならない。その姿が笑われていることにいつまでもバンプルは気付くことが出来ないのである。この物語で描かれた彼らの容姿、行動などで当時の救貧法や教区に関わる人びとが読者の笑いにどれほど苦しんだかを想像することも風刺になってしまう。また、彼らに対する風刺と皮肉はこの作品が読まれ続ける間は消えず、笑いは常に社会の悪を質し、矯正し続けることを強く表している。

## 注

テキストは Charles Dickens. *Oliver Twist*. Penguin Classics. 1985.を使用した。

<sup>1</sup> Sally Ledger. *Dickens and the Popular Radical Imagination*. Cambridge University Press. 2007. p.82.

<sup>2</sup> Daniel pool. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. Simon&Schuster. 1993. p. 241.

<sup>3</sup> George Mikes. *English Humour for Beginners*. Andre Deutsch. 1980. p. 60.

<sup>4</sup> Daniel pool. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew*. Simon&Schuster. 1993. p. 241.

<sup>5</sup> Henri Bergson. *Laughter*. Authorised translation by Cloudesley Brereton and Fred Rothwell. Macmillan and Co.,Limited. 1913. p. 17

<sup>6</sup> Sally Ledger. *Dickens and Popular Radical Imagination*. Cambridge University Press. 2007. p.82

<sup>7</sup> George Mikes. *English Humour for Beginners*. Andre Deutsch. 1980. p. 60

<sup>8</sup> Trevor May. *The Victorian Workhouse*. Shire publications Ltd. 2000. p. 15.

<sup>9</sup> George Mikes. *English Humour for Beginners*. Andre Deutsch. 1980. p. 61

<sup>10</sup> Henri Bergson. *Laughter*. Authorised translation by Cloudesley Brereton and Fred Rothwell. Macmillan and Co.,Limited. 1913. p. 197